

中世後期ケルンのイングランド商業

谷 澤 毅

目次

はしがき

I、ケルンのイングランド商業

II、リンク家のイングランド商業

III、ローゼンクランツとフィーホーフ

結び

注

はしがき

中世後期のケルンは、ドイツでも指折りの商業都市であった。その商業・流通面での拠点性は、商業権益の維持、拡大を目的とするドイツ・ハンザ（ハンザ同盟）にケルンが名を連ねていたことから、うかがうことができる。だが、ケルンはハンザの主要な都市であったとはいえ、組織としてのハンザへの貢献の度合いは高くはない。とりわけハンザ内部におけるケルンの異質性がはっきりと示された出来事としては、1471年のハンザによるケルンの除名処分を挙げることができるだろう。ハンザ・イングランド関係が悪化して戦争にまで発展していたさなか、ケルンのみはイングランド商業を継続し、いわば利敵行為に手を染めたのである。¹⁾

こうしたケルンの単独行動からは、他のハンザ主要都市とは異なるケルン独自の経済的利害の存在が想定されよう。リューベックをはじめとするハンザの主要都市が沿岸部の港湾都市だったのに対して、ケルンは内陸の商業都市であった。アントウェルペンなど低地地方との商業的な繋がりの

強いケルンにとって、その延長線上に位置するイングランドとの商業は、低地地方からフランクフルト方面へと延びるケルンにとっての通商動脈を成り立たせる不可欠の商業部門であった。²⁾ やがてイングランドは、16世紀にアントウェルペン・ケルンに向けて自国産毛織物を大量に輸出していくが、すでにそれ以前からケルンにとってイングランド商業は、ほかのハンザ都市で見られた以上の重みを有していたのである。

ところで、ケルン・イングランド関係に関して筆者は、ハンザとの関係を含めてケルンがハンザから除名されるまでのいきさつとその後の展開について、すでに検討したことがあった。³⁾ だが、その際考察の主眼は、ケルン・ハンザ・イングランド三者の外交関係の推移に置かれ、商業の具体的内容が明らかにされるまでには至らなかった。以下では、その考察の欠落点を補うべく、ケルンのイングランド商業の内実を個々のケルン商人の取引活動を中心に描き出してみることにはしたい。まず第1節で、ケルンのイングランド商業について概観する。続いて第2節、第3節では、15世紀にイングランド商業で活躍したケルン商人を個別に取り上げる。特に第3節では、共同で事業を繰り広げていた二人のケルン商人の関係決裂をも視野に入れて、商人同士の関係の具体例を提示してみることにはしたい。

I、ケルンのイングランド商業

都市ケルンは、古代ローマ時代以来の伝統を誇る。それだけにイングランドに向けたケルン商人の進出も早くから見られ、ハンザ形成以前の西暦1000年頃にまで遡ると考えられている。⁴⁾ イングランドにおいてケルン商人は、ロンドンのみならずスタンフォードやウインチェスターなどの年市開催地を訪れていたようであるが、14世紀初頭にイングランド各地の年市が衰退して国際商業がロンドンに集中するようになると、ケルン商人の同国における商業もロンドンを中心に営まれるようになった。⁵⁾

ロンドンでケルン商人がギルドホールを拠点に取引を行っていたこと

は、例えば、1194年に国王リチャード一世（獅子心王）がギルドホールのケルン商人を非課税扱いとする通達などからうかがうことができる。⁶⁾とはいえ、このギルドホールがやがては全ハンザ商人のためのロンドン商館（シュタールホーフ）として利用されるようになり、その過程でケルンに代わってリューベックがドイツ（ハンザ）商人に対する主導権を確保していくことになった。ケルンによるリューベック中心のハンザに対する反目意識は、ほかのハンザ都市と異なる独自の経済的利害のみならず、イングランド商業展開に際して見られたこのような事情から生まれたものでもあったのである。⁷⁾

イングランド在住ドイツ商人のなかでの影響力が以前と比べれば薄れたとはいえ、ケルンにとってイングランド商業が同市の商業基盤の主要部分であったことには変わりはなく、その重要性は15世紀にかけてむしろ高まったと考えることができる。また、ハンザの対イングランド商業におけるケルンの重要性も、ことのほか高く、無視できるものではなかった。イェンクスの研究を基にヒルシュフェルダーが挙げるデータから、ケルン商人のウェイトを確認しておく、14世紀のハンザの対ロンドン商業においてケルン商人が占めたシェアは30%程度であった。それが1420年から1421年までの間に50%程度にまで上昇し、1422年から1474年にかけてはほぼ42%から85%までの間を推移した。⁸⁾ハンザのイングランド商業においてケルン商人の占めた位置が、きわめて高かったことがわかる。

ハンザ・イングランド間商業においてとりわけ大きな位置を占めていた商品は、イングランド産の毛織物であった。イルジーグラーが挙げる毛織物商業に関する数値を見ると、15世紀後半にケルン商人がイングランド産毛織物の輸出全体に占める割合は5%から6%、ハンザが輸出したイングランド産毛織物に占める割合は25%から30%であった。ケルン商人が輸出した毛織物の量を見れば、1460年代から1470年代にかけてが約3000反（Tuch）から4000反、15世紀末で5000反前後であった。⁹⁾

一方、ケルンにとってもロンドンとの取引は、15世紀には牙城ともい

えるほど大きな意味を持った。イルジーグラーによれば、ケルンで購入され、消費されたイングランド産毛織物の量的な変動は、イングランドの毛織物輸出力の変動と驚くほど同じ動きを示すという。ケルンの毛織物市場を支配していたのがイングランド産であったということが、ここからは示される。さらにケルンに輸入された毛織物の多くは、さらにドイツ中部、大陸の奥地へと再輸出され、15世紀末になれば、フランクフルトなどケルン市外での販売は、ケルン市内でのそれと同率になるまで増加した。¹⁰⁾

ところで、中世後期から近世初頭にかけてのケルンは、アントウェルペンとの商業的な繋がりが強かったが、この時期のアントウェルペンこそは、イングランド産毛織物の流通を核とする枢軸とさえ言われたロンドンとの通商動脈の大陸側の窓口にはかならなかった。であるとすれば、アントウェルペンとケルンとの密接な商業関係を確認する作業は、間接的ではあれ、この16世紀の国際市場を介したイングランド、ロンドンとケルンとの通商関係を検証するうえで少なからぬ意味があると考えられる。例えば、1488年から1514年までの間にアントウェルペンを訪れた外国商人は2186名が記録され、そのうちケルン商人の数は532名に及び、これはアントウェルペンを訪れた外国商人全体の24%、またドイツ商人全体(1227名)の43%に達していた。¹¹⁾

だが、アントウェルペン・ケルン間で流通する商品は、この二都市を発送地ならびに目的地とする商品に限られなかった。アントウェルペンからケルンを経由してドイツ内陸部、中欧に達する通商路の重要性を考慮に入れば、ケルンよりさらに大陸の奥地にある商業都市に向けられた商品の多くも、低地地方(アントウェルペン)からケルン・フランクフルトを経由するケルンにとっての動脈を経由して輸送されたと考えることができよう。ハレルドの集計によれば、1543年から1545年にかけてアントウェルペンからの輸出が多いドイツの上位5都市は、ニュルンベルク、ケルン、フランクフルト、ライプツィヒ、アウグスブルクの順になるが、¹²⁾ケルン以外の4都市は、通商路の繋がりにから判断すれば、いずれも主にケルン

を經由して対アントウェルペン商業が行なわれていたと考えられる都市である。いうまでもなく、イングランド産毛織物は、これら4都市のアントウェルペンからの輸入品において大きな比重を見せた。¹³⁾

以上は、ケルン・イングランド間の直接的な取引を示すものではないとはいえ、ケルンにとってイングランド商業が持つ重みを検証する一つの証左とはなるだろう。

次に、イングランド商業で活躍した主なケルン商人の個別的な取引に焦点を当ててみたい。試みに、14世紀初頭にある程度継続的に記録を残したフランコ・デ・コロンFranco de Colonなる商人の場合を見てみよう。彼のロンドンにおける取引は、1305-1313年のロンドン側の関税台帳に記録されている。その内容は、ヒルシュフェルダーによれば、1308/09年の刀剣とアカネの輸入以外は、すべて羊毛のロンドンからの輸出であり、その量は1305/06年が34袋、その次年度の会計期間では18袋、1312/13年には31袋であった。¹⁴⁾ こうした記録からは、当時イングランドが大陸側 - おそらくはフランドル - に向けてなおも盛んに羊毛を輸出していたことがうかがえる。

15世紀になると、イングランドは原料である羊毛の輸出国から製品である毛織物の輸出国へと転身を図り、それとともにイングランドに進出したケルン商人が、毛織物やその他の商品を扱いながらバルト海に進出するケースも見られるようになった。例えば、ヨハン・ダッセJohann Dasseは、遅くとも1436年以降イングランドからバルト海商業に着手したと見られる。この年にはプロイセン船舶が拿捕されたとの記録があり、そこには彼が輸送を委託した沿バルト地域Baltikum向けのイングランド産毛織物が3テルリンク積み込まれていた。1451年にもダッセは、ケルンの同業者クライス・リンデマンとともにロンドンから毛織物をハンブルク経由で東方に送ったという。¹⁵⁾

ティルマン・クヴェステンベルクTilman Questenbergも15世紀にロンドン・バルト海間の商業で活躍した商人の一人である。最初彼は地元のダ

ンツイヒからケルンとの商業に従事していたが、15世紀初頭にケルンに移住すると、ここからロンドンへと進出していき、ケルン・イングランド(ロンドン)・バルト海(ダンツイヒ)を結ぶクヴェステンベルク家の商業の基幹線が形成されていった。当時の船舶の難破や商品没収の記録からは、ティルマンが甥のベルトルトなどと共に、ダンツイヒからイングランドに向けて蜜蠟を、また反対方向に向けてイングランド産毛織物を発送していたことが確認される。¹⁶⁾

そのほか15世紀に対イングランド商業を営んでいたケルン商人としては、アルフ・ブルヴェーア、ヨハン・リンク、ヨハン・ファン・ヴィッパーフルト(通称ローゼンクランツ)、ロベルト・ブリッテルスヴィッヒ、ヘルマン・ファン・アアなどが挙げられる。以下では、これらの商人の中から比較的記録の多いリンクとその一族、次いでヴィッパーフルト(ローゼンクランツ)を個別に取り上げ、章を改めてケルン商人の対イングランド商業の実像にさらに迫ってみることにしたい。

Ⅱ、リンク家のイングランド商業

リンク家は、ヘッセンのコールバッハ出身の家系である。その一員のヨハン・リンクJohann Rinckは15世紀前半のケルンを代表する商人の一人であり、毛織物をはじめとする様々な商品を扱っていた。イルジューグラーは、1426年から1433年にかけて毛織物を輸入したケルン商人の中から取扱量の多い12名について集計を行なっている。それによれば、ヨハン・リンクは1427年から32年にかけて合計721.5反(Tuch)のイングランド産を中心とした毛織物をケルンに輸入し、2位のゲルハルト・ブッシュェルマンを大きく引き離し、最多の輸入量を記録していた。¹⁷⁾

以下、ヨハンをはじめとするリンク家の取引のなかからイングランドとの商品取引に関わる主な記録を取り上げてみることにしよう。¹⁸⁾

1435年にヨハンは、同業者のティルマン・クヴェステンベルクやヨハ

ン・ダッセなどのケルン系商人と共にイングランドからミッデルブルフに向けて大量の毛織物を発送したところ没収されてしまった。これらの毛織物はその先のフランクフルトに向かうはずのものであったという。1437年にも彼は、やはりクヴェステンベルクやダッセなどとともにもイングランドから11袋と1樽の商品を発送したところ、それらを積み込んだ船が襲われて、商品を失ってしまった。

1439年以降、ヨハン・リンクは幾度かケルンで都市参事会員に名前を連ねるようになる。イングランド商業に時間を十分割くことができなくなった彼は、1441年頃にヨハン・ファン・アアをロンドンにおける彼の代理人に任命した。とはいえ、1440年代後半にはイングランドとバルト海の直接取引にリンクは携わるようになった。1447年にリンクとヨハン・ダッセ、それにアルフ・ブルヴェーアの各代理商は、ダンツィヒで仕入れた商品を3隻のイングランド船に託して発送したものの、エーアソン海峡付近で船が拿捕され、商品が奪われてしまった。ちなみにリンクの代理商たちが発送した商品の内訳は、銅19樽、亜麻布4袋、テンの毛皮1樽(360枚)、ハンガリー産の黒毛皮約500枚、灰7ラスト、そのほかハム、干した川鱒などであり、ダンツィヒからイングランド船が西欧方面に向けてどのような商品を輸送していたか知るうえで興味深い。¹⁹⁾

リンク家のイングランド、バルト海方面での商業には、しばしば一族のルトガー・リンクRutger Rinkも参加していた。ルトガーは、商品に付き従って移動することもあったという。しかし、彼に関する取引の記録は多いとはいえ、商品の損失にまつわるものが目立つ。例えば、1450年夏にリュベックの海賊がイングランド人所有の船舶に略奪を仕掛けたとの記録がある。奪われた商品の中にはヨハン・リンクが出資して仕入れた多くの商品があり、そこにはヨハンとルトガー両人の名義の5テルリンクと二つの大袋の毛織物(恐らくイングランド産)をはじめとする3000グルデン近くの商品が含まれていた。同じく1450年7月、ルトガーは、ロンドンからイングランド人を船長とする船舶に乗り込んでダンツィヒに向かお

うとした。ところが、スカゲン岬付近で船舶が拿捕されてしまい、織物3 stuck (Stück) を失ったルトガーの損失額は1778グルテンに及んだという。²⁰⁾ この拿捕事件では、ヨハン・リンクも損害を被った。

ルトガーの災難はさらに続いてしまう。1453年に彼は大口の毛織物をロンドンからダンツイヒに送り出したところ、すべてリュベックで没収されてしまった。1460年にはペーター・ロッパなる人物が所有する船舶が、ロンドンからベルゲン・オブ・ツォームに向けて出港したところ、途中フランスの海賊に襲われてしまった。襲撃された船には12名のケルン商人が合わせて24テルリンクの毛織物を積み込んでおり、ルトガーは4テルリンクの毛織物を失うことになった。こうした一連の打撃から、ルトガーはどうとう立ち上がることはできなかったという。²¹⁾

15世紀後半になると、リンク家ではヨハンの甥であるヘルマン Hermannの活躍が目立つようになる。ヘルマンに関する記録もいくつか取り上げてみよう。

1461年にヘルマンは、ベルトルト・クヴェステンベルクやペーター・カネンギーシャーなどケルン系の同業者とともに、アントウェルペンのある船舶に毛織物や毛皮、書籍、金銀製品を積み込んだところ、その船舶は、ロンドンからオンフルールに向かう途中で襲われてしまった。ところで、ヘルマン・リンクが活躍した1460年から1470年代にかけての時期は、ハンザ・イングランド関係が悪化して双方の側から相手側に対する攻撃と報復とが頻発した時期である。例えば、1468年7月28日にイングランド国王エドワード四世が、イングランド在住の全ハンザ商人の身柄と商品とを拘留してしまうという出来事があった。これは、その前に生じたデンマークによるイングランド船襲撃事件 — ハンザの差し金があったとされる — に対する報復措置として実行され、当時イングランドと商業を行っていたケルンの主導的な商人の一人としてヘルマンも、ペーター・カネンギーシャーやクリスティアン・クヴェステンベルクなどとともに身柄を拘束されたハンザ商人のなかに名前を連ねていた。なおハンザ商人のうち、ケル

ン商人のみはこの後条件付で解放され、ハンザ・イングランド関係が実質戦争状態へと至った後も、イングランドとの商業を継続していく。かくしてケルンは、1471年にハンザから除名されてしまう。

ハンザ・イングランド間の戦争は、1474年のユトレヒト条約締結まで続くが、その間、ヘルマンはほかのケルン商人と共にイングランドで引き続き商業を行っていた。例えば、ロンドンと対岸の大陸側とを結んでいた船舶の一隻が、1471年から72年にかけての冬にオステンデ沖で難破したことがあった。これによりヘルマンは、積み込んでいた18の赤く染めた毛織物とほかの13の毛織物、それに13のイングランドのクッションを失ってしまったという。²²⁾

ケルンは1478年にハンザに復帰する。ケルン商人は、ユトレヒト条約締結以降、イングランドにおけるハンザ特権から除外されていたが、これにより再び特権を享受することができるようになった。とはいえ、ヒルシュフェルダーによれば、この頃のヘルマンは事業の第一線から退き、取引の権限を息子たちに委譲するようになっていたという。1492年にヘルマンは遺言書を書きしるした。苦悩と不運の連続であったとはいえ、遠隔地商人としては成功を収めたといえる生涯を回顧しながら、ヘルマンは息子たちの事業が無事続くように彼らに財産が分与されるべく、手はずを整えた。こうしてヘルマンの事業は次の世代へと継承されていったが、ケルン・イングランド関係の再度の冷却化のもと、新規の会社がそれまで以上の業績を上げたとは考えられないとヒルシュフェルダーは述べる。なお、ヘルマンの息子たちのうち父親と同名のヘルマンは、1502年8月にイングランド国王ヘンリー七世より、今後毎年20ポンドの年金が支給される旨通知を受け、その額は同年11月に30ポンドに増額されたという。²³⁾

Ⅲ、ローゼンクランツとフィーホーフ

15世紀にイングランド商業で活躍したケルン商人のなかでは、ヨハン・ファン・ヴィッパーフェルト、通称ローゼンクランツ（以下ローゼンクランツとして扱う）Johann van Wipperfürth, gen. Rosenkrantzに関する記録も比較的多い。後に触れるように、ローゼンクランツは、義理のおじとなったゲルハルト・フォン・デム・フィーホーフGerhard von dem Viehofと共同で事業を展開していたが、財産の継承をめぐり裁判で争うことになった。以下ではこの裁判を扱ったイルジグラーの研究成果に依拠しながら、このフィーホーフとの関係を中心としたローゼンクランツの活動を描き出すことにより、前章と時代はやや前後するが、15世紀前半のイングランド商業で活躍したケルン商人の足跡の一端に迫ってみたい。²⁴⁾

フィーホーフは、遅くとも1425年11月には結婚したと考えられている。相手はローゼンクランツのおばのガイルトギンGeirtginであり、彼女にとっては、これは二度目の結婚であった。最初の結婚相手が資産家であったことに加え、しかもその資産家との結婚に際して、彼女はローゼンクランツの父のインゲルIngelから高額の嫁資を得ていた。財産の面から、彼女の存在はフィーホーフにとって大きなものだったに違いないとイルジグラーは推測する。その後フィーホーフは、1429年にイングランド・ファーラー（イングランド渡航商人団）のガッフェル²⁵⁾の代表に選出されたが、これは彼の財力がものを言ったのであろうか、きわめて早い出世であるという。さらに彼は、市参事会にも名前を連ねるようになり、社会的な上昇を遂げていった。

さて、フィーホーフと義理のおじと甥の関係になった頃、ローゼンクランツは、自らの取引活動をフランドルやイングランドの毛織物へと徐々に特化させようとしていた。彼が商品を仕入れてパートナーがその販売を行なうという形で事業は進められていたが、そのパートナーとしてフィーホ

ーフはローゼンクランツの毛織物取引に加わり、新会社が結成されることになった。当時ローゼンクランツの年間の収益はおよそ150グルデン。しかし、仕入れのために必要となれば、4000もしくは5000グルデンの借入れを受けることも可能であった。なぜなら、彼が振り出した手形に対しては、フィーホーフによりケルンで期限内にきちんと支払いがなされていたので、ローゼンクランツには十分な信用があったからである。かくして、ローゼンクランツはイングランド産の毛織物をはじめとする商品を仕入れてケルンのフィーホーフに向けて発送し、一方のフィーホーフは金属製品や高地ドイツ産のバルヘント織をローゼンクランツに向けて発送するという南北間での分業関係が形成されていった。

とはいえ、フィーホーフの事業はローゼンクランツとの会社に限られているのではなかった。複数の事業に携わっていたフィーホーフの年間の収益は、ローゼンクランツと会社を結成していた頃には毎年3000グルデンに達していた。ここで、再度イルジグラーによる15世紀ケルンの主要な毛織物輸入商人に関する集計値を見ておくと、1426年から1433年にかけてフィーホーフは合計243,5反の毛織物を輸入し、上位から6位を占めていた。²⁶⁾ 彼は当時のケルンにおける最も裕福な商人の一人であった。彼と比べれば、ローゼンクランツの取引規模は少なかった。ローゼンクランツは、フィーホーフと会社を組むようになってから、イングランドに向けた商用旅行に際して二人の手代と二匹の馬を同行するようになり、そのための経費も年間350から400グルデンは計上できるようになったという。フィーホーフとは比較し得ないとはいえ、ある程度の大商人として体面を重んずるための支出もかさむようになったと考えられる。²⁷⁾

ローゼンクランツとフィーホーフの手を経てイングランド産の毛織物がどのような流通経路を経たか、少し具体的に見ておこう。²⁸⁾ 1437年から1439年にかけて、ローゼンクランツは合計224反、価格にして7000グルデン以上に相当するイングランド産の毛織物をケルンなど大陸内部に向けて発送したことが記録されている。その内訳は、染色されたものが114反、

そのうち54反が赤、9反が真紅 (blutrot)、25反が白、14反が緑、4反が灰色、3反が黒に染められていた。色別で見れば、赤と真紅、緑に染めたものがそれ以外のものより高額で販売され、1反当たりの販売額が40グルデンになることもあった。一方、黒く染めたものは1反当り35グルデンを超えることはまれで、灰色のものは30グルデンに達することはほとんどなかった。²⁹⁾

これら224反の毛織物のうち、28反はフィーホーフ家のハインリヒに向けられたほか、37反は、ゲルハルト・フィーホーフ自身がブリュッセルの南東約20kmにある小都市ヴァヴレWavreで販売した。地元ケルンで販売された量は111反である。20名程のその購入者は固定客で、買い入れた毛織物は小売されたり加工されたりした。残りの48反はフィーホーフ(ゲルハルト)によりフランクフルトに送られ、そのうちの20反が1437年の秋の大市で、26反が1438年の四旬節の大市で、残りの2反が同年の秋の大市でそれぞれ販売された。これら毛織物の購入者も、フィーホーフにとっては固定客であり、その出身地は、シュパイエル、アルザスの諸都市、バーゼル、ミュンヘン、シュトラウピンク、パッサウ、ハム、ヴェルツブルク、エルフルト、アイゼナハ、ピルナ、エゲル近郊、そしてボヘミア北部に及んでいた。これらのフィーホーフの販路からは、ケルンのドイツ南部、東部に向けた通商ネットワークの広がりとともに、ケルンの商業にとってフランクフルトがいかに重要な位置を占めていたかが理解される。³⁰⁾

但し、以上に列挙したフィーホーフの取引相手には、本来なら多数フランクフルト大市に訪れていたはずのニュルンベルクやアウクスブルク、ウルム、レーゲンスブルクといった高地ドイツの大商業都市の出身者が含まれていない。この点についてイルジーグラーは、これら大都市の商人は、直接アントウェルペンに進出してイングランド産の毛織物を入手していたので、ケルン商人の仲介を必要としていなかったのだとの解釈を示す。³¹⁾ なお、フィーホーフからローゼン克蘭ツに向けては、高地ドイツ産のパ

ルヘントが商品の中で中心的な位置を占めた。例えば、1438年にフィーホーフは、フランクフルトで35束（Fardel）のアウトスブルク産バルヘントを仕入れ、そのうち16束はケルンへ、残りがアントウェルペン、イングランドへと送られて、ローゼンクランツがそれらの販売を引き受けた。

ところで、以上で見たようなイングランド産毛織物の取引が繰り広げられていた頃、ローゼンクランツは、イングランドとの関係をこじらして同国との関係修復を求めていたブルゴーニュ公により和平実現のための仲介使節に任命され、少しずつ商業活動から手を引きつつあった。そのようなさなか、ローゼンクランツは、フィーホーフの妻であるおばのガイルトギン死去の知らせを受け（1439年）、ケルンへと赴いた。ところが、彼は、フィーホーフから、ガイルトギンから自分への遺贈分が2000グルデンしかないことを聞かされるとともに、遺言書の閲覧さえ拒否されてしまった。フィーホーフによるこのような仕打ちに対してローゼンクランツが大いに不満を抱いたであろうことは、想像に難くない。ローゼンクランツこそは、ガイルトギンに最も近い血縁者であり、しかも、フィーホーフの現在の莫大な財産の土台となったのは、ローゼンクランツ（ヨハン）の父インゲルがフィーホーフの妻ガイルトギンの最初の結婚に際して与えた嫁資だったからである。

代理人を介した交渉の後、ローゼンクランツとフィーホーフは、1441年に一旦は合意に達する。そのおもな内容は、ローゼンクランツは2000グルデンの受け取りに甘んじる代わりにフィーホーフは彼を実の息子のように見なし、事業を支援するとともに、遺言書を作成する際にはローゼンクランツに遺産の三分の一を割り当てるというものであった。無論、不満は残っていたとはいえ、ローゼンクランツは裁判に持ち込んで事態の解決を長引かせることよりも、フィーホーフとの合意を優先したのである。

さて、このような合意が達せされた後、フランドルに赴いたローゼンクランツが、地元ケルンの商人から16束のバルヘントを購入したことがあった。だが、支払いに際して手持ちの資金が十分ではなかったため、ロー

ゼンクランツは、彼の事業を支援するとのフィーホーフの言葉を信じて支払人をフィーホーフとする額面370グルデンの為替手形を振り出して不足分を補った。その後、イングランドに渡ったローゼンクランツは、先に購入したバルヘントを売却する。そして、恐らくはその売却益を元手として2000グルデン相当の毛織物を購入し、それをケルンのフィーホーフのもとに発送した。ところが、フィーホーフは、ローゼンクランツから送られてきた毛織物を売却せずに梱包されたまま放置し、あまつさえ、提示されたローゼンクランツ振り出しの手形の支払いさえ拒否して、その手形を不渡りにしてしまった。不渡りの連鎖を最小限に食い止めようと、ローゼンクランツとフィーホーフのかつてのパートナーであったケルン市参事会員ペーター・エンゲルブレヒトが、フィーホーフに代わって別の手形の支払いを引き受けてくれたとはいえ、ローゼンクランツがこれまで築き上げてきた信用は一挙に失われてしまった。

なぜフィーホーフは、かつてのパートナーであり甥でさえあるローゼンクランツを、あえて苦境に陥れようとしたのか。イルジグラーは、その理由は不明であるという。フィーホーフ側の真意を問いただせないまま、ローゼンクランツは彼を提訴に持ち込み、裁判が始まった。判決が言い渡されたのは1450年10月26日、ローゼンクランツ側の訴えが認められ、フィーホーフの違約によりこれまでローゼンクランツが被ってきた損失に対する賠償と裁判に要した費用、それにかつてガイルトギンに贈与された婚資(6000グルデン)のローゼンクランツ側に対する支払いがフィーホーフに命じられた。フィーホーフ側はこの判決を不服としたので、裁判は続行されることにはなった。だが、審議の過程でまずフィーホーフが命を落とし、さらにフィーホーフの遺産をめぐる権利を主張していたローゼンクランツも亡くなってしまい、後者が請求していた債権と抵当権はブルゴーニュ公領のある参事会員が継承してその獲得を求めていくことになった。だが、その参事会員も、それらの請求を取り下げることを条件とする年金受け取りの提案に同意し、ローゼンクランツ・フィーホーフ間の裁

判は結審に達することなく、1469年5月25日に最終的に幕が引かれることになった。³²⁾

結び

本稿では、中世後期ケルンのイングランド商業について、15世紀に活躍したケルン商人によるイングランド産の毛織物商業を中心に考察してきた。以上の検討からも示されたように、ケルン・イングランド間商業は、ケルン商人の広域的な通商ネットワークのなかで営まれていた。例えば、第2章で取り上げたリンク家の場合、イングランド商業はバルト海、ダンツィヒ方面との商業と結びついていたほか、第3章で取り上げたローゼンクランツ、フィーホーフの場合、イングランド産毛織物の流通は、両人の役割分担のもと、ケルンから南のフランクフルトを経て、さらにその南や東の地域にまで及んでいた。

このような広がりを持つ毛織物を中心とするイングランド商業は、様々な商業部門を発達させてきた商都ケルンにとってもきわめて重要な商業部門であった。しかもそのイングランド商業は、低地地方（アントウェルペン）からケルンを経てフランクフルト方面に延びる太い流通のパイプへと束ねられ、ケルンの「生命線」ともいえる通商動脈の主要部分をかたちづくっていた。「はしがき」でも指摘したケルンと他のハンザ港湾都市との利害の相違は、このようなケルン独自の商業基盤の存在から説明されるであろう。この通商動脈を成り立たせているイングランド商業がケルンにとって不可欠な意味を持つからこそ、ハンザ都市ケルンは、ハンザ・イングランド関係の険悪化に際して、あえてハンザ除名といった処分に甘んじながらもイングランド商業を継続させていったのである。³³⁾ 16世紀に向けて、アントウェルペンを経由する大陸内部に向けたイングランド産毛織物の流通がさらに活発化していくにつれ、アントウェルペンとの結びつきの強いケルンにとってイングランドとの通商関係が持つ意味合いは、さらに

増したものと推測される。

注

- 1) ハンザ期のケルン・イングランド関係を扱った研究として、例えば以下がある。
H.Buszello, Köln und England (1468-1509), in: Mitteilungen aus dem Stadtarchiv von Köln, 60, 1971, S.431-467. S.Jenks, Köln/Lübeck/Danzig, Unvereinbarkeit der Interesse im Englandhandel, in: Die Hanse. Lebenswirklichkeit und Mythos. Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989, hg. von J.Bracker u.a., Lübeck, 1999, S.141-151.
- 2) ケルンの通商動脈については、以下の拙稿を参照。「近世初頭の国際商業とケルン - アントウェルペン・ケルン・フランクフルト -」、鈴木健夫編『「ヨーロッパ」の歴史的再検討』、早稲田大学出版部、2000年、169-194頁。
- 3) 拙稿「[ハンザ都市]ケルンの外交と商業 - イングランド商業をめぐる -」、鈴木健夫編『地域間の歴史世界 - 移動・衝突・融合 -』、早稲田大学出版部、近刊。
- 4) G.Hirschfelder, Die Kölner Handelsbeziehungen im Spätmittelalter, Köln, 1994, S.395, 398.
- 5) Ebenda, S.399, 422.
- 6) Ebenda, S.388-399.
- 7) ハンザ形成期のイングランドにおけるケルン商人の位置については、以下を参照。高橋理「合同ハンザ成立以前におけるドイツ商人のイングランド貿易 - 『商人ハンザ』の一研究として -」、『文化紀要』(弘前大学教養部)、第8号、1974年、33-66頁。千脇修「イングランドに於けるドイツ・ハンザの形成」、『西洋史論叢』、第12号、1990年。
- 8) S.Jenks, England, die Hanse und Preußen. Handel und Diplomatie 1377-1474, 3 Bde, Quellen und Darstellungen zur hansischen Geschichte (以下 QDHGと略), NF.36, Köln/Wien, 1992, S.358, G.Hirschfelder, a.a. O.,S. 402.
- 9) F.Irsigler, Anmerkung zu den Kölner Wirtschaftsbeziehungen mit England im 15. Jahrhundert, in: Frühformen englisch-deutscher Handelspartnerschaft, QDHG, NF, 23, Köln/Wien, 1976, S.107.
- 10) Ebenda, S.109.
- 11) 拙稿「近世初頭の国際商業とケルン」、177頁。
- 12) D.J.Harrelld, High Germans in the Low Countries. German Merchants and Commerce in Golden Age Antwerp, Leiden/Boston, 2004, p.195.
- 13) イングランド産毛織物は、ニュルンベルクにおいてのみ香辛料に次ぐ位置を占めていたほかは、いずれの都市においても輸入額で最大であった。Ibid., p.196.

- 14) G.Hirschfelder, a.a.O., S.399.
- 15) Ebenda, S.416.
- 16) Ebenda, S.229-230, 415. クヴェステンベルク家によるイングランド産毛織物の取引の記録として、例えば以下を参照。B.Kuske, Quellen zur Geschichte des Kölner Handles und Verkehrs im Mittelalter, 4 Bde. Publikationen der Gesellschaft für Rheinische Geschichtskunde XXXIII, Bonn, 1917-1934, Bd. II, Nr.24, 69.
- 17) F.Irsigler, Die wirtschaftliche Stellung der Stadt Köln im 14. und 15. Jahrhundert. Strukturanalyse einer spätmittelalterlichen Exportgewerbe- und Fernhandelsstadt. VSWG Beihefte Nr.65, Wiesbaden, 1979, S.72.
- 18) 以下 G.Hirschfelder, a.a.O., S.402-410 に依拠する。
- 19) B.Kuske, Quellen, Bd. I, Nr.1169. G.Hirschfelder, a.a.O., S.232, 404.
- 20) B.Kuske, Quellen, Bd. II, Nr.36, 37. G.Hirschfelder, a.a.O., S.404.
- 21) G.Hirschfelder, a.a.O., S.404-405.
- 22) B.Kuske, Quellen, Bd. II, Nr.560, 568. G.Hirschfelder, a.a.O., S.407.
- 23) G.Hirschfelder, a.a.O., S.409.
- 24) F.Irsigler, Kölner Kaufleute im 15. Jahrhundert. Die Akten des Prozesses Rosenkranz/Viehof als Quelle für die kölnische Handelsgeschichte, in: Rheinische Vierteljahrsblätter, 36, 1972, S.71-88. 以下にローゼンクランツとフィーホーフに関する記録がある。B.Kuske, Quellen, Bd. III, Nr.1, S.1-11, Nr.2, S.11-29, Nr.3, S.29-31.
- 25) ガップェルとは、ツフト・兄弟団を母体にして市民・住民全員加入原則に基づき編成された市政官選出団体のことを指す。田北廣道『中世後期ライン地方のツフト「地域類型」の可能性 - 経済システム・社会集団・制度 -』、九州大学出版会、1997年、9、323頁。
- 26) F.Irsigler, Die wirtschaftliche Stellung der Stadt Köln, S.72.
- 27) この点を、後にローゼンクランツとの関係がこじれた際、フィーホーフは批判した。F.Irsigler, Kölner Kaufleute im 15. Jahrhundert, S.77.
- 28) Ebenda, S.79-80. また、以下も参照。F.Irsigler, Die wirtschaftliche Stellung der Stadt Köln, S.72-73.
- 29) 西欧中世に緋色（真紅）の毛織物が高い評価を受けたことについては以下を参照。中村美幸『フランス中世の衣生活とひとびと - 新しい社会経済史の試み -』、山川出版社、2000年、51-69頁。また、赤を抽出するための染料については以下も参照。エイミー・B・グリーンフィールド(佐藤桂訳)『完璧な赤 - 「欲望の色」をめぐる帝国と密偵と大航海の物語 -』、早川書房、2006年。
- 30) ケルンにとってのフランクフルトの重要性については、拙稿「近世初頭の国際商業とケルン」を参照。またフランクフルトの大市については、小倉欣一『ドイツ中世

都市の自由と平和 - フランクフルトの歴史から -」、勁草書房、2007年、第6章「大市と商品・貨幣流通」139-166頁を参照。

- 31) アントウェルペンと高地ドイツ諸都市との取引関係については、以下で掘り下げて検討されている。D.J.Harrel, op.cit.
- 32) 裁判の経過については、その前の関係悪化の過程も含めて、F.Irsigler, Kölner Kaufleute im 15. Jahrhundert, S.82-88を参照。
- 33) 詳しくは、拙稿「「ハンザ都市」ケルンの外交と商業」を参照。